

京都大学地理学談話会

会 報

第32号



2021

[目次]

寄稿

アルバイトの思い出	谷田 信生 (1984年卒)	1
卒業後の話	松島 文子 (1996年卒)	3
京大でアジアを考える	趙 政原 (2012年修)	6
地理学からアートへ、アートから地理学へ	山本 功 (2015年卒)	8
記憶の海から贈られるもの	橋詰 奈央 (2016年卒)	13

秋季地理学談話会の報告 ……

〈オンラインOB交流会〉 幹事(OB)：井上悠輔、氏家(木村)真紀子、 北川哲也、郡田篤、福本拓、松井威(いずれも2001年卒)) 幹事(在校生)：堀川泉(2016年卒)、松本優希(2018年卒)	15
--	----

研究室便り

〈総合博物館での地図資料等の利用について〉	17
〈地理学談話会『会報』バックナンバーのKURENAI登録と公開のお知らせ〉	17
〈画像アーカイブの公開～地理学教室所蔵の古地図～〉	17
〈地理学教室への寄贈図書～2020年度～〉	17
〈研究室の動静〉	20
〈新メンバーの自己紹介〉	
〈2020年度の実習旅行〉	
〈学部卒業生・院生等の進路〉	
〈院生の研究状況の報告〉	
〈2021年度講義題目〉	

事務局から

〈地理学談話会2020年度会計報告〉	25
〈訃報〉	26
〈住所不明者についてお願い〉	26
〈オープンキャンパス：2020年度の報告と2021年度のお知らせ〉	28
〈2021年度秋季地理学談話会について〉	28
〈地理学談話会名簿改訂のお知らせとお願い〉	28

※表紙写真：『萬國人物圖會』（京都大学文学研究科図書館所蔵）部分
（請求記号：地理研:L1/734/貴重）

寄稿

アルバイトの思い出

アスタービジョン(株)
谷田 信生 (1984年卒)

1984 年に卒業し、還暦となった。エッセイをと頼まれて、誇れる業績も経歴もなく、最初困惑したが、学生時代のアルバイトにまつわる備忘録を、まとめてみることにした。決して皆様のお役に立てる内容ではないので、悪しからず。

私の出身高校は、神奈川県栄光学園で、同級生の 4 人に 1 人は東大に進学し、6 人に 1 人は医者になっている。そんな中で、私は、劣等生だったし、学校はつまらなかった。その反動もあり、1 浪を経ての大学入学後の解放感は、そもそも嫌いな勉強に向くはずがなく、暇があればアルバイトで金を稼いで、まとまった金ができたら大好きな旅に出るという方向に向かっていった。

3 回生のときに、応地先生の 1 学期最後の実習を無断欠席（先輩からは、前代未聞だとお叱りを受けた）し、北海道に出かけて 1 ヶ月近く滞在。すっかり北海道に魅了された。その後更に 3 回も北海道に足を運んでしまい、卒業論文も「北海道の防風林」をテーマにすることとなった。

さて、本題。

2 回生の夏、長野県野辺山の高原野菜農

家に泊まり込みで働いた。白菜、レタス、キャベツなどの野菜を収穫し、農協の集配所に運び込むのが仕事で、超重労働である。腰をかがめて行う作業が多く、特に最初の 1 週間はつらかった。標高 1,300 メートルの高所で空気も薄い。こちらから申し出ない限り、休暇も全くなかった。私の働いた農家にはひと夏で数多くのアルバイトが配属されてきたが、8 割方は 1 週間以内に音を上げた。女子短大生もきたが、3 晩目に夜逃げした。

1 日だけ休暇をもらって、八ヶ岳登山をした。早朝に登山口までトラックを借りて同僚のアルバイトに送ってもらい、真教寺尾根から赤岳、横岳を踏破し杣添尾根を駆け下りてきた。コースタイム通りであれば山中 1 泊の行程である。ちょうど帰路にバスがあり、農家には午後 4 時くらいに戻ったと思う。更に 2 時間ほど農作業をこなした。このアルバイトをしていた時は、毎日高所トレーニングをしていたようなもので、間違いなく人生で最も体力があった時



知床半島クルーズ船—北海道旅行にて

期だった。精神的にも肉体的にも充実したひと夏であった。

2 回生の秋から翌夏まで、修学旅行生御用達の日昇別荘という京都市中心部にある旅館でアルバイトをした。朝夕の配膳、布団の上げ下げ、部屋の清掃が主な仕事だった。

食事時間帯は、調理室から各部屋に 10 段重ねのお膳を運ばなければならなかったため、戦争状態だった。2 回ほどお膳の上部を廊下に突き出た看板に引っかけてド派手に食事を床にぶちまけたことがあった。従業員（特に調理担当の板さん）や修学旅行生の手前、恥ずかしいやら、情けないやら。

修学旅行生の一員として、角川映画で人気絶頂だった薬師丸ひろこさんが来たことがあった。館内ではピンク色のジャージ姿で普通の高校生そのもの。友人からあだ名で呼ばれ楽しそうに話をしていた。しかし、自由行動の日は、友人との行動は許されておらず、カモフラージュの眼帯をして教師 2 名ほどに付き添われて外出していたのが、お気の毒であった。

5 月は女子高月間。部屋に入るタイミングを間違えると覗きよばわりだ。夕食後、布団敷きに入った部屋の中で過激な女子高生たちに出口を通せんぼされて、幽閉されたこともあった。バイトのお兄さんを困らせてやろうという魂胆だ。どうにか脱出したが、翌朝になって“犯人”のうちの一人の子が謝りに来た。「生徒と仲良くなったら、バイトをクビになるって聞いた。ホントにごめんなさい。」

3 回生の後半から 4 回生までは、銀閣寺道にあった「大銀」という食堂で働いた。調理と配膳が主な仕事だった。繁忙時間帯に、どのように注文と配膳をさばくかが勝負だった。配膳したその足で、手ぶらで戻るのではなく、近くのテーブルの食事が終わったお膳を下げてくるのがコツだと知った。

金曜日の遅番の日は、仕事が終わって賄いの夕食後、正社員の方にタクシーでなんと木屋町のキャバクラに連れて行ってもらえた。自己負担は全くなかった。「大銀」は既に存在しないが、こんなバイト先、今もあるだろうか。



富良野「北の国から」石の家—北海道旅行にて

卒業して、ジャスコ（現イオン）に就職することになった。

耳にタコができるほど、繰り返し質問されたフレーズがある。

「なぜ京大まで卒業してこんな会社に入社したのか」

面白い仕事ができそうで伸びしろがありそうというのが正直な答えだったが、うんざりした。また、何人かからは、「京大出身は、ちょんぼなヤツが多い」とも聞いた。頭でっかちで役立たずとか世間知らずというイメージだろうか。いずれにしても、11年間在籍して、ちょんぼとはみなされなかったのであろう。初歩的なちょんぼをアルバイト時代に出し切っていたのが功を奏したのかもしれない。退職前数年間はイオングループの連結決算を統括する部署に配属され、私の仕事の上での礎である経理業務には精通することができた。その基礎があったからこそ、その後在籍した会社では更に M&A や株式上場などの業務にも守備範囲を広げることができたと思う。

自分で6年前に起こした会社（アスタービジョン株式会社）は、当初無謀にも未経験の旅行業として開始したが、結局はホームグラウンドとも言える経理財務中心のコンサルティング業務主体に転換し業績はやっと安定してきた。末永く現役を貫くためには何をすべきか、思いを巡らせている今日この頃である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

++*+*+*+*+*+*+*+*+*+*

卒業後の話

(医療法人)大分記念病院

松島 文子(1996年卒)

初めまして。平成8年卒業の松島文子と申します。氷河期世代です。地理学の同期は4年間で卒業して就職した学友もいれば進学した学友も。私は人間・環境学研究科で2年間の修士課程を過ごしました。新たな師、学友、先輩方に出会い、他分野の単位をとるというシステムのおかげで魅力的な研究領域を知る機会となり、またしても進路に迷いましたが、勇気も能力もなく、卒後は就職することにしました。6年間も親元を離れ、経済的に負担をかけてしまっていると感じており、そろそろ働こうと思ったのです。

地元に戻る、帰らないで悩むよりもまずどこかに就職できるだろうかというくらい求人がない氷河期時代でした。東京や大阪、福岡で面接を受けつつ、同時に地元でも就職活動をしていました。特に地元の情報がなく、OB 訪問を試みましたが地方にはそもそもそのような制度はなく、無理やり京大工学部の先輩お一人に会っていただいただけです。中には紹介者がいないと試験を受けられない放送局もありました。最初に内定が出たのが地元の新聞社で、正直なところ就職活動で疲れていたのもう決めてしまいたいと思ったのです。

日本や世界を代表する企業の中核で働いているサークル同級生たちもあの頃の就職



(写真1) サークルの同級生たちと

活動は「黒歴史」だったと口を揃え、メンタルを削られる経験であったと大人になって再会して語り合っております(写真1)。

さて私は新聞社「初」の女性正社員として採用されました。新聞社の中には総務、営業、広告、イベント事業部などいろんな



(写真2) 旧佐賀関町で浦ごとに行われる盆踊り

部門がありますが、私は報道部配属で社会部記者としてスタート。「サツ回り」、つまり事件事故担当になりました。同期の男性記者2人や他社（全国紙やNHK、地方放送局）の記者たちと特ダネを競い、抜いた抜かれたの世界に放り込まれて（負け続けてい）ました。現場にいかに早く到着するか、情報を察知するか、どんな人間関係を築いていけばよいか、どこに行けばいい写真が撮れるかという職業上の課題はある意味フィールドワークに通じるものがありました。

記者5年目で支局勤務となりました。関アジ関サバで知られる漁師町、北海道郡佐賀関町（今は大分市と合併）が主な取材エリアでした。そこで初めて地域で生きる人々の生活、興味深い郷土文化にじっくり向き合うことになりました。支局時代は取材活動もプライベートも楽しかったです。無人島に渡って戦争遺跡を歩いたり、浦ごとに行われる盆踊りを訪ねたり(写真2)、地層剥き出しのスポットを見つけたり(写真3)、一本櫓で船を漕ぐレースに出たり(写真4)。中でも夢中になったのは漁師町独特の狭い路地や人々が荷物を運ぶのに使う「大五郎車」でした(写真5)。特に大五郎車にはいろんなバリエーションがあり、休日を使って町内をくまなく歩いて観察したり、大五郎車研究会を結成し、ルーツをたどって四国まで出かけたりしました。



(写真3) 旧佐賀関町の絶景—地層がはっきり見える露頭



(写真4) 一本櫓の船漕ぎレース

そんな新聞記者生活の中で私は2度の産
体育休を取得しました。24時間365日仕
事モードだった私に「考える時間」が生ま



(写真5) 大五郎車—薪や灯油缶を運んだり、漁具を乗せることも

れました。第1子の出産後はキャリアへの
焦りがあり、すぐに復職しましたが、第2
子出産後は30歳の壁とでも言うのでしょ
うか、「このまま仕事を続けていいのか？」
と考えるようになり、育休中に受験勉強を
開始しました。記者稼業はアウトプットば
かりでインプットが実は少なく、勉強した
くなったのです。特に新聞社は理系のバック
グラウンドを持った記者が少なく、自然
科学の勉強をしたいとぼんやり考えていま
したが、結果的に私は現在、医師として地
域医療に従事しています。記者として勤務
した佐賀関の病院にも勤務しました。医療
もやはり24時間365日の営みで体力的に
きつい日もありますが、患者さんとの雑談
の中で思いがけない「歴史」を知ることが
密かな楽しみです。世界遺産「沖ノ島」に
住んでいた方、京城（ソウル）の医療セン

ターで看護師として働いていた方、鹿児島
の通信基地で無線を聞いていた方。およそ
90-100 歳で認知機能がある程度保たれて
いる方の戦時中の話はとても貴重です。

折しもコロナ禍で勉強会も学会も出張
もほぼゼロとなり、軒並みオンライン開催
です。家にいる時間が増えたため、趣味の
音楽活動に勤しんでいます。3 歳から 17
歳まで習っていたピアノを再開したばかり
でなく、家で鳴らせる楽器に夢中になり、
ウクレレやオカリナを始めました。

以上、とりとめなく半生を自分語りして
しまいました。医師として働きながらも心
の中にいつも地理学があることを自覚して
います。地理学談話会のご案内をいただき
ながらもいつも見送っていましたが、卒論
修論発表会が初めて zoom 開催となり、久
しぶりに地理学のスピリッツに触れ、刺激
を受けました。学部卒業時には想像もして
いなかった人生を歩んでいます。執筆の機
会をいただき、感謝申し上げます。皆さ
まのご健勝をお祈り申し上げます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

京大でアジアを考える

東南大学
趙 政原(2012年修)

京大の地理学教室をはなれて、まもなく
10 年経った。田中先生からエッセイ執筆

の依頼メールをいただき、懐かしい思い出
が蘇ってくる。私が京都大学との出会いは、
2009 年のことだった。中国の南京大学の
日本語科を卒業し、日本へ留学することを
決意した。高校時代から地理が好きだった
こともあり、留学先では地理学を専攻する
ことにした。最初は研究生として半年勉強
し、翌年の 4 月から院生として入学した。

院生としては、授業はもちろんあるが、
主に研究活動を行ない、日々の生活は研究
室中心で過ごしていた。地理学教室の院生
では、中国人留学生は私一人しかいなく、
ほぼ全員日本人の環境だった。それでも、
私はすいぶん楽しかった。同期たちは全員
熱心で、論文の日本語をチェックしていただ
き、旅も一緒に誘われた。研究室はかなり
自由な雰囲気、毎週、仲間と鍋やお好み焼
きを食べたり、私も含めてみんな話好き
な性格で雑談が多すぎて、研究がなかなか
進まない時も若干あった。仲間からたま
に、"留学生らしくない"と言われたことも
あった。その理由ははっきりしていないが、
日本の冗談にある程度通じていたからかも
しれない。

小さい頃から旅が好きだった。京大に在
籍した二年半、日本文化の源流ともいえる
京都をじっくり散策できた。重要な観光ス
ポットはもちろんだが、市内で歩いても楽
しかった。特に修論を書く数ヶ月の間、ほ
ぼ週に一回大文字山～哲学の道のコースに
沿って散歩していた。大学にも割合に近く、
気楽にストレスを和らげることもできた。



京都で一番好きな散歩道

私は、高校と大学の時代、大阪と福岡それぞれ半年と一年間過ごしたことがある。普通の中国人留学生と比べ、日本はそれほど馴染みのない国ではなかった。滞在した2つの都市で、大なり小なり、日本と中国の間おける何かしらの「カルチャーショック」をたくさん体験していた。私は、日本と中国、そして東アジアの相互理解の進展には、最新流行の文化と観光客の交流が最も重要だとずっと思い、京大での修論研究も東アジア都市における文化産業、広告産業の比較をテーマとして取り上げた。

京大に在籍した間、米国にも半年ぐらい滞在した。各地での名所巡りはもちろんだが、外部からの視点でアジアを見ることは重要だと考え、アジア研究の授業もいくつ受けていた。実際、大学に通って、多数のアジア系アメリカ人と留学生に出会い、アジア系アメリカ人の間の連帯感の強さを実感した。特に二世や三世になると、より国別ではなく、アジア系の文化を共有するのがごく普通になっている。私が滞在していたアナーバーというミシガン州南東部に

ける大学都市では、日本料理店は数軒あるが、いずれも韓国人または中国人によって経営されている。もちろん、アジア系アメリカ人は決してアジア人ではなく、少なくともナショナリズムの点では大きな差がある。ただし、地理的近接性と外観的類似性で親近感を生じやすいことは確かであり、歴史的遺産と現代文化をふまえて、アジア多国間の「共有文化」を探り、相互的な文化協力による「アジア文化」の創造に向かうことも決して不可能ではないと思う。

2012 年京大の地理学教室で修士課程を修了し、その後、東京大学で博士号を取得し、現在は、南京市に所在する国立大学の一つ、東南大学で教えている。地理学の研究分野からは離れず、観光地理、経済地理を中心に研究活動が続いている。調査対象は、日本と中国はもちろんだが、最近視野は少し広め、東南アジアを含めた東アジア地域を中心に研究している。最近の数年間、日本と中国がが東南アジアで競合するインフラプロジェクトが増える一方、それぞれ得意分野生かしながら「日中第三国市場協力」のケースもよく提起される。フィールドワークなどを通じ、多様な社会と環境に触れることは大切で、2019 年ラオスでも現地調査を行った。なじみのない小さな内陸国だが、メコン川と山々に囲まれ、「アジア最後の秘境」とも言われる。特に古都のルアンパバーンは華麗な寺院と王宮が詰まった街で、伝統的な文化や行事はよく残っている。近年、中国や日本から多数の経済援助を受け、インフラ整備、文化交流なども盛んになっている。ラオスの首都ビエ



ヴァンヴィエンでのアウトドア・アクティビティ

ンチャンにあるワットタイ国際空港は日本の開発援助によって整備され、ビエンチャン市内でも日本から無償供与されたバスが走っている。一方、中国雲南省のボーテンとビエンチャンを結ぶ中老鉄道をはじめ、中国からのインフラ投資も急速に増えている。経済発展によって、ラオスの農山村地域も急速に変容した。特にヴァンヴィエンという町はカルスト地形に恵まれ、アウトドアやトレッキングなどで積極的に海外から観光客を誘致している。今のところ、海外のうち、6割以上は韓国人の観光客だそうである。

以上、思いついたことをまとめもなく書き上げたが、最近日本語で文章を書く機会が少なく、意思をうまく伝えていない箇所もあるかもしれない。いずれにせよ、地理学教室に対し、自由な環境を提供し研究を支えてくれた先生方、そして共に勉強したり遊んだりした仲間たちに感謝の気持ちでいっぱいである。これからも地理の世界で引き続き地理的・文化的にも近いアジアの研

究を進めていきたいと考えている。本稿を読まれた学生たち、日本人であれ、留学生であれ、海外、特にアジアに興味をもっと持っていただければ幸いである。



ビエンチャンの街で走っている日本のバス

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

地理学からアートへ、
アートから地理学へ

タメンタイ合同会社
山本 功(2015年卒)

京都大学文学部地理学専修で学び、早いもので卒業から6年あまりの月日が流れま

した。紆余曲折を経て美術領域に携わるようになり、現在は広島を拠点にアートマネジメントに関わる小さな会社を経営しています。

地理学からアートの世界へと足を踏み入れていく中で、両者には少なからず重なり合う関心領域があるに違いないという思いを強くしています。人文事象について、その地域的な構造や差異を探究するのが人文地理学だとすれば、それはまさしく現在、アーティストやキュレーターが関心を寄せているテーマにほかなりません。いかにローカリティを深堀していくかという問題は注目の的なのです。

他方、人文地理学における空間論的展開や物質論的展開といった動きは、美術の領域への接近に見えます。物質的／象徴的な表現としての美術作品は、展覧会という形式で発表されますが、その構造は作品を空間的に布置すること、マッピングすることによって成立します。

にもかかわらず、悲しいかな、地理学界で美術関係者をあまり見かけないのと同様に、美術界限においても人文地理学の認知は必ずしも高くありません。話題を共有できる素地は十分に広がっているはずなのに。運命の歯車が噛み合わずにすれ違いを続けるラブロマンスを見ているようで、ひとり歯がゆい思いすらしています。

そんな状況に一石を投じるべく、地理学専修から美術へと領域を横断してきた個人史を通じて、土地の理と表現の間にある結節点について考えてみることにします。

卒業論文で扱った文化実践と主体性の問題

そもそも文化芸術に関心を寄せるようになったのは、卒業論文で音楽を扱ったことから始まります。研究対象は、地元・広島における市民による音楽実践。被爆都市としての「ヒロシマ」と関わりを持つ演奏や歌唱行為の主体性と存立機構、そして音楽実践行為を通じて、このまちと取り持つ関係性についてインタビュー調査しました。

調査を通じて、歌うこと、演奏することによって、目の前の人に何かが伝わっていることが確認される、あるいは活動によって伝わっていく気がする、といった感覚が共有されることが活動を継続させる精神的基盤となっていることがわかってきました。そして、活動の主体性を獲得することはすなわち、こうした経験によって、公的で画一的な「ヒロシマ」をめぐる語り（たとえば、「被爆の惨禍を忘れず、世界平和と核廃絶を願います」といったもの）との距離感やポジショニングを規定していくプロセスによるものだ、という主張を試みました。

文化実践行為の喜びを共有すること、お金だけではない活動の対価があることに触れた経験が、いまの自身の活動の源泉となっているようにも思います。

「アートの島」直島で農業担当に

さて、学部卒業後は「アートの島」こと香川県直島へと移り住み、この島を中心に「ベネッセアートサイト直島」を運営する公益財団法人福武財団へと就職します。

直島について簡単に紹介しておくと、人

口 3000 人余りの島は北部・中央部・南部と区域ごとに役割が分かれています。島の北部には 1917 年に操業開始した精錬所を中心とした工業地域がひろがり，中央部が文教・生活区域，そして南部は観光エリアとなっています。



草間彌生「南瓜」と大勢の観光客

ベネッセアートサイト直島は，島の南部にある複数の美術館とホテルに加え，集落の中にも展開する美術施設や周辺島嶼での活動も含んだ総称です。基本方針には「瀬戸内海の風景の中，ひとつの場所に，時間をかけてアートをつくりあげていくこと―各島の自然や，地域固有の文化の中に，現代アートや建築を置くことによって，どこにもない特別な場所を生み出していく」と掲げ，その場所で展示するからこそ意味を持つ「サイトスペシフィック・ワーク」を展開しています。土地と密接な関係をもつ表現の可能性について思いを馳せ，ここで

ならばなにかできるかもしれないと考え就職したのでした。

さて，美術系財団の一員となったものの，配属は「直島コメづくりプロジェクト」の担当となりました。農業は未経験。身ひとつで田んぼに通う 3 年間を過ごすことになります。

「直島コメづくりプロジェクト」は 2006 年に開催された展覧会「NAOSHIMA STANDARD2」の関連企画として始まったものです。耕作放棄地が広がる景観に対する問題意識と，食や農業と人間の暮らしという文明論的な視座を見据えたプロジェクトとして，休耕田を開墾し，イベント等が開催されました。展覧会の会期が終わると，作品は撤収されます。しかし農耕行為は同様の扱いとはならず，再び田んぼを放棄する選択とはなりません。そこで，現在にいたるまで財団スタッフが田んぼの耕作に携わっているわけです。



田んぼで雑草を抜いている様子

米作りには八十八の手間があると言われるが，そのひとつひとつが後の工程に影響するため失敗ができないのが難しいとこ

ろです。まったくの素人にはただでさえ荷が重いにも関わらず、担当者の急な交代や、酷暑や大雨などの異常気象にも翻弄され、さらにこのころから特に深刻化した鳥獣害の対応には手をこまねくばかりでした。地域の人たちからのときに優しくときに厳しいアドバイスは一意に定まらないことも多く、はたしてどのタイミングでなにを実施すべきか、無い経験をベースに日々判断しなければならなかったのは、なかなか厳しいものでした。

田んぼで働くにあたって、地域との関係性構築は大きな役割のひとつでした。財団と住民の接点として、怒られることもありましたが、お茶に呼ばれたり雑談したりということも仕事の一部でした。そんな経験がなおさら、アートは大多数にとって「よくわからないもの」であり、にもかかわらず持ちうる価値と果たすべき役割についての考えを深める契機ともなっています。

こうして、田植えから収穫までをなんとかかたちにし、地域の人を招いてイベントを継続し、しばらく財団内の自家消費のみにとどまっていたものを、少量ながら販売再開させました。体制の再整備という決して派手な成果ではありませんが、自然相手のプロジェクトマネジメントにおいては、継続するというそのことがどれだけ困難で尊いか、身を持って痛感しました。

美術事業の立ち上げ

そこから美術業界に本格的に関わるようになったのは、じつはここ 2-3 年のことです。2018 年に家庭の事情もあり直島の財

団を離れ、地元広島に拠点を移しました。さて何をしようか、と考えていたタイミングで、あるアーティストとの出会いがあり、彼の手伝いをはじめました。そこから関わるアーティストの数がひとり、またひとりと増えていったのが美術事業のスタートです。展示場所の文脈を汲み取りつつ、表現を社会的、空間的に成立させるために必要なマネジメント業務を手掛けています。

広島には、じつは多くの若手アーティストが暮らしており、小規模ながらローカルなアートシーンが形成されています。作品発表空間はそれなりの数があるものの、メディア機能の乏しさも相まって市民にとっては必ずしも身近ではないかもしれません。微力ながらムーブメントを作っていけないものかと無い知恵をひねっているところです。

瀬戸内国際芸術祭の影響からか、開催県である香川県と岡山県では広島県よりもアート熱が高まっており、プロジェクトの依頼も増えてきました。あるようでない瀬戸内圏の結びつきを綱渡りしながら、瀬戸



最近制作に携わった作品「3匹のお花」(辻孝文) [撮影：松村美由記]

内海を横断するように広島作家たちを輸出するような役割もこなしています。

そんな牧歌的なローカルアートシーンの萌芽と比べると、グローバルなアートシーンは多分にポジショントークの要素を含んだ血なまぐさいものに映ります。既存の美術史の文脈に対していかに差異化しながら再接続していくか、という価値更新のゲームのなかで、マネーゲームの波を軽やかに乗りこなすプレイヤーもいれば、自らの表現欲求に忠実であろうと、辺境に隠遁し、独自の世界観で飽くなき探究を続けるアーティストも存在します。時代の審級を経て歴史に名を残すのは、そのどちらとも限らないところに趣深さがあります。

そんななかで、アートにおける地域主義的な文脈はひとつの潮流といえるでしょう。西洋白人男性中心主義的だった美術史の編み直しが迫られる昨今において、マイノリティとしての非西洋や辺境地域を深堀していく方向性が顕著化しているのです。国内でも、多少文脈は異なるものの、特に2010年代において地方創生の文脈を受けて地方芸術祭が勃興しました。

ある体系に従って事物を空間的に構成する行為が地域性に接近するとき、アートが地域をどのように摂取するか、そして地域はアートをどのように受け止めるかという2つの問題があるように感じます。アーティストと鑑賞者と地域住民は、お互いにどのように作品と地域を理解し、理解させるか、という問いが見過ごされているように思えてならないのです。これは地域やアートという対象とどのような距離感を設定

し、ポジショニングをとるかという主体性の問題であり、すなわち卒業論文で扱ったつもりの問題とも通底します。

美術から地理学へのラブコール

アーティストはますます地域に接近し、その地域の特性を物質的・象徴的な見せ方で作品へと転化しています。しかし、地域の人達が芸術に高い関心をもっているとも限らないのと同様に、美術関係者の側でも地域と良好な関係を取り結んでいくための知見が十分に蓄積されていない様子が伺えます。実際、地域でどのようなリサーチをすればよいのか自信がない、地元の人たちとどのようにコミュニケーションをとっていけばいいのかよくわからない、という声もたびたび耳にしていました。地域との関係性構築に失敗すると作品は成立しませんし、逆に幻想化しすぎてしまうこともリスクをはらみます。

そんな個人的に感じていた危機感から、「アートとフィールドワーク研究会」というオンライン講座を立ち上げました。昨春秋以来、不定期に開催しており、第1回はアフリカをフィールドとする文化人類学の若手研究者を、第2回はリサーチベースで地域住民の視線を可視化する作品を手掛けるアーティストを招きました。地域とアートの双方が発展的な関係を構築していくためにどうしたらよいか、考える場としていきたいと考えています。

言語の限界を非言語表現は軽やかに超えていくこともあるのだな、というのは美術シーンに触れるなかで日々感じることで

す。他方、非言語表現を言語化するとどうも舌つ足らずで耳に障ることあります。研究者とアーティストではその方法論に違いこそあれ、お互いに学び刺激しあっていければよいのに、というのが偽らざる思いです。展覧会形式の研究成果発表だってあってもいいのでは、モノに語らせたほうがわかりやすいこともあるのでは、とすら思っています。

地理学と美術の両領域の親和性が顕在化し、人的物質的な交流が盛んになることで、相互に発展していくことを願ってやみません。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

記憶の海から贈られるもの

西日本旅客鉄道（株）
橋詰 奈央(2016年卒)

晩夏。十歳の坊主頭の子が一人、裸で川遊びをしている。彼は、手銛を片手に河鹿取りに熱中していて、プロペラの音が近づいてきていることに気がつかない。ふと気配を察し顔を上げると、上流から戦闘機が低空飛行で進来してくる。彼は慌てて脇の竹藪に飛び込み、立ち尽くす。戦闘機が勢いよく横を過ぎたとき、操縦席の精悍な顔の青年が彼に微笑みかけたように見えた。

という光景を、私は小さい時から何度も思い出す。もちろん、私自身の体験ではなく、亡き祖父から聞いた話である。

祖父が戦闘機を目撃したその川は、信州 U 高原麓の T 村内を流れている。私も子どもの頃は、夏休みになるとその川を訪れ、幼い祖父が戦闘機を目撃したであろう川原で、祖父と同じように手銛と木箱でできた簡素な水中眼鏡を手に、河鹿取りをしたものであった。

十歳の祖父が経験した夏と私が過ごしている夏が、同じ場所や遊びを通して繋がっている。そうした思いが、祖父が見たはずの光景を、いつしか私自身の経験かのように幾度となく頭の中で再生させるようになった。



小学校低学年になると、土日になれば T 村の祖父母の家へ遊びに行った。昭和初期に建てられた二階建ての母屋は何間も和室が続く日本家屋で、暗闇が多く一時でも一人で居ることが怖かった。

祖父母の家の裏にある「ホンケ」は萱葺きの家で、遊びに行くと、「ブンケ」である祖父母宅よりも一層暗闇が多く、湿気も

多い家で驚いた。明治生まれの「ホンケ」のおじいさんは絵描きだったから、低い天井の壁には私の背丈ほどもある油絵が、幾枚も所狭と並んでいた。油絵の中のワンピース姿で立つ鋭い眼の美しい女と、縁側に頬被り姿で座り豆を選り分けることに勤しむ、眼前の「ホンケ」のおばあさんが同じ人物であることが信じられなかった。

高校生の頃、祖母と二人で本家に入ることがある。「ホンケ」のおじいさんと「ホンケ」のおばあさんが亡くなってから随分経ち、空き家となり埃に埋もれた本家の暗闇には、ワンピース姿の美しい女が以前と変わらぬ鋭い眼を持ち、油絵の中で静かに立っていた。



暗闇が怖かった祖父母の家は、私が九歳の頃に建替えられた。祖父は長く癌を患っていたので、建替えた新居に数か月も住まずに亡くなった。私はいわゆる「おじいちゃん子」だったので、当時は悲しみに暮れたはずだが、年を経るにつれて、当時のこ

とは記憶からぼろぼろとこぼれ、鮮明に思い出せることはほとんど無くなっていった。

大学生の頃、講義の合間の時間を持て余し、吉田南図書館でモノクロの邦画を観ていたとき、邦画の葬列のシーンから、ふいに祖父が亡くなったときの記憶を思い出したことがある。それは、祖父の葬列の場面で、集落外れにある墓地へ向かう路傍に、色とりどりの紙吹雪が舞い落ちるシーンだ。

葬列には、長い竹竿の先に、ゆるく編まれた竹籠が結いつけられたものを持つ人が複数加わっていて、その人たちが歩を進める度に、不安定な竹竿の先がゆらりゆらりと揺れ、頭上の竹籠の網目から無数の紙吹雪が、はらはらと舞った。祖父が亡くなったのは五月だったから、新緑の山村に、金色や朱色の紙吹雪がゆっくりと舞い落ちる様子があまりにも美しく、子どもながらに悲しいはずの葬列とそぐわない気がした。十歳の私は葬列の後ろからよたよたと付いていき、金色や朱色の紙吹雪を、誰にも見つからぬようこっそりと拾っては、黒色のワ



ンピースのポケットに忍ばせた。

十年以上前の記憶が、全く別の場所で、ふいに想起され戻ってきたことに私は驚き、不思議な気持ちでその後の講義へ向かった。

大学四回生の頃、私は卒業論文の調査地を T 村と決め、久しぶりに長い時間を祖父母の家で過ごす機会を得た。調査を進める合間に、私は祖母から年中行事について様々教えて貰い、メモとして書き留めた。

「蟹年取り」、「物づくり」、「どんど焼き」一特に一月の行事が多かった。調査期間は丁度お盆の時期でもあり、私は祖母の手ほどきを受けながら様々な行事の手伝いをしたのだが、私からすれば煩わしいとすら思える行事を、「そういうものだから」とごく当たり前にこなす祖母はすごいと思った。

昨秋、父から一通の手紙が届いた。今年で八十歳になる祖母の認知症がいよいよ深刻となった旨と、祖母が近隣の市街地にあるグループホームに運良く入居ができた旨が記載されていた。手紙には、マスク姿の祖母が他の入居者と談笑しながら干し柿を作る様子や、娘時代からの特技を発揮し、グループホームを彩る生花を真剣な面持ちで活ける様子の写真が同封されていた。

病気のため、既に祖母は年中行事のことも忘れてしまったかもしれない。私は慌てて、四回生の頃に祖母から聞き書きした年中行事のメモを探したのだが、あれから何回か経験した引っ越しの荷物に紛れたのか、結局メモは見つからなかった。

言語化も記録もされないような些細な出

来事の記憶を、私たちは日々の生活の中で無数に生み出している。大半は忘れられてしまうような出来事の数々。それらが失われたことすらわからなくなることが、痛切だと感じることもある。

一方で、ごくたまに、それらの記憶が思いがけぬ形で保存されたり、ふとした拍子にぽっかりと浮かび上がってきたりすることもある。

祖父の記憶が私のものかのように幾度となく思い出されたり、亡くなった「ホンケ」のおばあさんが今でも油絵の中から暗闇に向けて鋭い眼差しを投げかけていたりするように。古い映画から想起されて、全く異なる場所で十年前のシーンが蘇ってきたように。そのように呼び戻される些細な出来事の記憶は、本当に大切な贈り物のようだと思う。

祖母から聞き書きした年中行事のメモも、いつか思わぬ形で戻ってくることもあるかもしれないと思っている。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

秋季地理学談話会の報告

2020 年度の秋季地理学談話会は、新型コロナウイルスの感染拡大により、教室見学会、講演会、懇親会は取りやめ、11月7日(土)、OB交流会のみオンラインで開催しました。OB交流会で幹事をつとめてくださった卒業生の方々(井上悠輔、氏家(木村)真紀子、北川哲也、郡田篤、福本拓、松井

威 (いずれも2001年卒)), 在校生の方々 (堀川 泉 (2016年卒), 松本優希 (2018年卒)) に厚く御礼申し上げます。

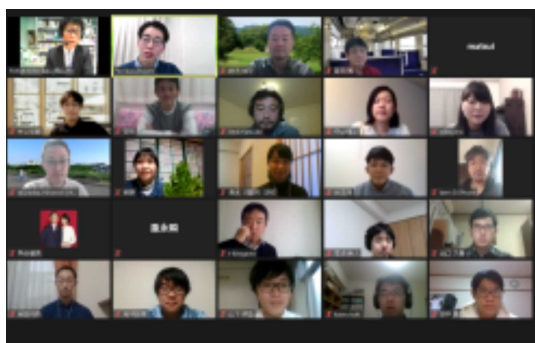
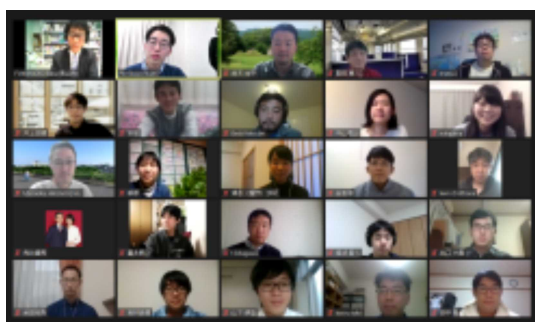
オンラインOB交流会について、報告します。

<オンラインOB交流会>

オンラインOB交流会は、談話会で初めての試みということもあり、卒業生と在校生とにチームを組んで幹事を務めていただくことになりました。幹事の方々の間で相談して、進行内容も企画していただきました。ありがとうございました。

卒業生から在校生たちへは、自身の体験や試行錯誤の歩みを語りつつ、具体的なアドバイスを、また、在学生からは先輩への質問や相談の他、参加者同士の間での紹介や近況報告も含め、活発な情報交換や楽しい交流が行われました。ニューヨークやバルセロナ、三宅島といった海外からも含めて40名を超える方々の参加があったのは、オンラインならではのことでした。

* オンラインOB交流会に参加された方々



* 当日のスクリーンショットより

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

研究室便り

＜総合博物館での 地図資料等の利用について＞

総合博物館地理資料部門に収蔵されている地図資料等の閲覧・撮影などを希望される方は、他の文化史部門（日本史・考古学）同様、お手数ですが、下記の窓口までご連絡のうえ、所定の手続きをお取りくださいますようお願いいたします。

京都大学総合博物館 事務室

電話：０７５－７５３－３２７２

※地図資料のうち、収蔵部局が不明なものについては、地理学共同研究室にお問い合わせください。

電話：０７５－７５３－２７９３

＜地理学談話会『会報』

バックナンバーの

KURENAI登録と公開のお知らせ＞

京都大学附属図書館学術支援課学術支援掛からの要請を受け、地理学談話会が発行する『会報』のバックナンバーが、2020年11月、京都大学学術情報リポジトリ（KURENAI）に登録され、電子ジャーナルとして公開されました。

<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/259238>).

談話会会員のみなさまには、2020年5月、事前のお知らせとお願いをいたしましたところ、期限までに、掲載反対の声はございませんでした。公開にご理解を賜り、厚く御礼申し上げます。

なお、『会報』は、1934年の創刊第1号から8号、1958年に発行された号、さらに1990年の復刊第1号以降について、製本されたものが、文学研究科図書館に配架されております。冊子体のほうもどうぞご利用ください。

＜画像アーカイブの公開 ～地理学教室所蔵の古地図～＞

2020年10月1日、京都大学貴重資料アーカイブに地理学教室所蔵の古地図1点の画像データが公開されました（下記参照）。

・大明省圖

<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1387138>

＜地理学教室への寄贈図書

～2020年度～＞

昨年度、地理学教室にご寄贈いただいた図書、雑誌等の一覧です。寄贈していただきました方々に厚く御礼申し上げます。これらの図書は、文学研究科図書館または地理学共同研究室に配置し、学生ならびにスタッフの研究・教育に活用させていただ

いております。卒業生の皆様にもご利用いただけますので、どうぞご活用ください。

(図書)

- ・古代中世における領域編成と空間的思考／知泉書館
- ・エコロジーの世紀と植民地科学者／名古屋大学出版会
- ・ラップランドの自然と人／古今書院
- ・山の民の地域システム／東北大学出版会
- ・景観からよむ日本の歴史／岩波書店
- ・地形と日本人／日本経済新聞出版本部
- ・われわれは「自然」をどう考えてきたか／どうぶつ社
- ・市場の書：マーケットの経済・文化史／同文館出版
- ・重税都市／住まいの図書館出版局
- ・ゲッターを捏造する／彩流社
- ・レンズが撮らえた 19 世紀英国／山川出版社
- ・レンズが撮らえた 19 世紀ヨーロッパ／山川出版社
- ・アフロ・ユーラシア大陸の都市と宗教／中央大学出版部
- ・神と村／伝統と現代社
- ・持続可能な開発／古今書院
- ・エーヤーワディーの河の流れ／古今書院
- ・近世八重山の民衆生活史／榕樹書林
- ・失われた世界の記憶／光村推古書院
- ・4 カ国語による防災用語集／国際防災の十年国民会議
- ・経済地理学会 50 年史／経済地理学会
- ・日本都市学会大会の 60 年（1953 ～ 2013）／日本都市学会
- ・聖と俗塔と広場の思想／玉川大学出版部
- ・地中海 神と人の世界／玉川大学出版部
- ・航海術の歴史 原書第 2 版／岩波書店
- ・都市をたたむ／花伝社
- ・帝国日本の生活空間／岩波書店
- ・世界住居誌／昭和堂
- ・曼荼羅都市／京都大学学術出版会
- ・ヨーロッパ半島／晶文社
- ・マレー諸島／思索社
- ・地理生態学／蒼樹書房
- ・都市大災害／近未来社
- ・地名の政治地理学 地名は誰のものか／古今書院
- ・持続可能な都市の「かたち」と「しくみ」／東京立大学出版会
- ・産業構造の変化と外国人労働者／明石書店
- ・ラペルーズ世界周航記：日本近海編／白水社
- ・岩波講座「開発と文化」全集／岩波書店
- ・環境・エネルギー・社会／ミネルヴァ書房
- ・山脈：台湾地図館／遠足文化事業
- ・インド・新しい顔／サイマル出版会
- ・景観哲学をめざして／北樹出版
- ・世紀末の都市と身体／ブリュッケ
- ・際の都市論／山海堂
- ・アマゾンとアンデスにおける一植物学者の手記／築地書館
- ・和食の地理学／平凡社新書
- ・ビーズでたどるホモ・サピエンス史／昭和堂
- ・令和 2 年十津川村置村 130 年記念誌／十津川村教育委員会
- ・地理学科 50 年のあゆみ／奈良大学地理学教室
- ・令和 2 年度特別展 発掘された土木技術／大阪府立狭山池博物館
- ・ジオ・パル NEO 第 2 版／海青社
- ・よみがえる福井震災（本編・写真集セット）／

現代史料出版

- ・社会とともに生きる賃貸住宅／ぎょうせい
- ・ゼンリン住宅地図 京都市 1~11 (全域)／ゼンリン
- ・千里地理成長記 3／関西大学文学部地理学・地域環境学教室
- ・기후변화로 보는 지구의 역사／문학사상
- ・Wie China nach Europa kam／Wagenbach
- ・Die Wiener Altstadt／Deuticke
- ・Das System der zentralen Orte Österreichs／Böhlau
- ・NEPAL DEVELOPMENT AND CHANGE IN A LANDLOCKED HIMALAYAN KINGDOM／ILCAA, Tokyo Univ. of Foreign Studies
- ・Shanghai: scènes de la vie en Chine: les figurines de bois de T'ou-Sè-Wè／Équateurs
- ・130 Years of Historical Geography at Cambridge 1888-2018／Historical Geography Research Group (雑誌)
- ・茨城地理 第 21 号 (茨城地理学会)
- ・エネルギー史研究 no.35 (九州大学記録資料館)
- ・えりあぐんま 第 26 号 (群馬地理学会)
- ・大阪府立狭山池博物館研究報告 11
- ・お茶の水地理 第 59 号
- ・学術研究助成報告集 第 6 集 (国土地理協会助成担当)
- ・観光科学研究 第 13 号 (首都大学東京)
- ・観光と考古学 創刊号 Vol.1
- ・関西学院史学 第 48 号
- ・京都府漁協だより 第 29 ~ 32 号
- ・空間・社会・地理思想 第 24 号
- ・国士舘大学地理学報告 no.28
- ・駒澤地理 第 56 号
- ・ジオグラフィカ千里 第 1 号 (千里地理学会)
- ・しま no. 262, 第 66 巻, 第 1 ~ 3 号 (財団法人日本離島センター)
- ・人文学部紀要 第 41 号 (神戸学院大学人文学部)
- ・千里地理通信 (関西大学地理学研究会会報) 第 82 号
- ・地域学研究 第 34 号 (駒澤大学)
- ・地域研究 vol. 60, no. 1 ~ 2
- ・地域研究年報 42 (筑波大学)
- ・地域と社会 第 23 号 (大阪商業大学)
- ・地學雜誌 vol.129, no2 ~ 6, vol. 130, no.1
- ・地図情報 vol.40 no.1 ~ 4
- ・地理 5 ~ 3 月号 vol. 65 ~ vol. 66
- ・地理学研究 第 48 号 (駒澤大学)
- ・地理学評論 vol.93, no.3 ~ 6, vol. 94, no. 1 ~ 2
- ・地理研究 28 号 (法政大学)
- ・地理学報告 第 122 号 (愛知教育大学地理学会)
- ・地理誌叢 第 61 巻第 1・2 号 (合併号) (日本大学地理学会)
- ・東北文化研究所紀要 第 52 号 (東北学院大学)
- ・砺波散村地域研究所研究紀要 第 37 号
- ・苗場山麓シホハーク 研究集録 第 2 号
- ・奈良大地理 第 26 号
- ・人間文化 H&S 47 ~ 48 (神戸学院大学)
- ・広島大学現代インド研究 空間と社会 vol.10 ~ 11
- ・文化史學 第 76 号 (同志社大学・文化史学会)
- ・法政地理 第 53 号
- ・待兼山論叢 日本学篇 53 ~ 54 (大阪大学)
- ・立命館地理学 32
- ・理論地理学ノート No. 22 (首都大学東京)
- ・歴史人類 第 49 号 (筑波大学)

- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 no. 31
- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊第 28 号-1 ～ 2
- ・ANNUAL REPORT OF THE MURATA SCIENCE FOUNDATION, No.34
- ・ASIAN AND AFRICAN AREA STUDIES, no.19-2, no.20-1
- ・GEOGRAPHICAL REPORTS OF TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY, No.54 ～ 55
- ・IATSS Review (国際交通安全学会誌), vol. 45, no.1 ～ 3
- ・Japanese Journal of Southeast Asian Studies, vol. 58, no.1 ～ 2
- ・SOUTHEAST ASIAN STUDIES, vol. 9, no.1 ～ 3 (報告書)
- ・地域調査実習報告書「宮城」(金沢大学人文学類地理学教室)
- ・長野県軽井沢町の地理 地理学実習報告書(44) (関西大学地理学・地域環境学教室)

＜研究室の動静＞

研究室の事務は、引き続き三上純子さんをお願いしております。

本年度は、大学院博士後期課程 6 名，修士課程 9 名，学部 4 回生 20 名，3 回生 16 名，日本学術振興会特別研究員（RPD）1 名，研究生 1 名が在籍しています。

＜新メンバーの自己紹介＞

本年度は，新たな顔ぶれとして，3 回生 16 名と修士課程 1 回生 4 名，日本学術振

興会特別研究員（RPD）1 名を迎えました。2020 年 10 月から在籍されている研究生の方も合わせて，簡単に自己紹介させていただきます。

（3 回生）

安藤 颯汰

新 3 回生の安藤颯汰と申します。福岡県福岡市出身です。バイクツーリングが趣味で，昨年の夏に宗谷岬まで下道で行ったのが思い出です。高校時代からこの専修に行こうと考えていたので，これから頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

池田 尚平

3 回生の池田尚平です。高校で受けた地理の授業がきっかけで，地理学を専攻しようと思いました。都市地理学や交通地理学に興味があります。陸上競技部に所属し，競歩をしています。よろしくお願いします。

池田 雄士

新 3 回生の池田雄士です。大阪府高槻市の出身ですが，中学から京都なので京都通いは 9 年目です。高校の時からこの地理学教室に入ろうと思いようやく入れたので非常に楽しみです。何でも面白いと思えてしまいやりたい事が決めきれませんが頑張ろうと思います。

越智 隼大

越智隼大と申します。出身は奈良県の奈良高校で，軽音楽をやっています（ドラムで

す)。小さい頃から道路地図とかを眺めるのが好きで、大学でもその系統に進みたいと思い地理学専修に来ました。仲良くして下さい！よろしくお願いします。

黒田 開

新三回生の黒田開です。「開」と書いて「はるき」と読みます。千葉県八千代市出身です。地理学専修に入りたくて京大を受験したので、入れて嬉しいです。普段はビッグバンドジャズのサークルで、トロンボーンを吹いています。どうぞよろしくお願いします。

小林 夕莉

3回生の小林夕莉です。高校は歴史選択でしたが、街歩きや鈍行列車の旅行、異文化交流が好きなので地理に興味を持ちました。コロナ禍でどこにも行けず、旅行計画ばかり溜まっています。広島出身で、地域で土砂災害があったので、災害対策にも興味があります。

佐藤 壮之介

京大カレー部総料理長を務めています。南アジアの食文化について研究したいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

千代 航大

はじめまして、千代航大です。千葉県の渋谷幕張高校出身ですが、生まれは滋賀県なので京都にも元々なじみがあります。趣味は旅行や野球観戦などです。地理に対する興味は未だ漠然としていますが、気軽に話

し掛けて頂ければ幸いです。宜しくお願いします！

土居野 溪心

はじめまして今年度より新たに地理学専修でお世話になる土居野と申します。サークルではバドミントンをやっていて、体を動かすことが好きです。名字をもじった「どいやー」というあだ名があるので皆さんも気軽に呼んでください。

西山 幸志

広島県広島市出身の西山幸志です。昨今は広島弁と関西弁が混じり、自分のアイデンティティを見失いつつあります。一回生の頃に受けた総人の山村先生の講義から、地理学に興味を持ちました。趣味は読書と散歩です。よろしくお願いします！

原 万尋

3回生の原万尋です。東京都の桐朋高校出身です。京大一人旅同好会に所属しています。地理学専修を選択したのも、そのあたりの旅行や観光への興味・関心が影響していると思います。よろしくお願いします。

平山 周吾

文学部新3回生の平山周吾です。Chot ★ Better というサークルでフリーペーパーを作っています。趣味はカメラです。これからどうぞよろしくお願いします。

松本 弥

新3回生の松本弥です。福岡県出身です。

大学ではワンダーフォーゲル部に所属しています。趣味は料理と筋トレです。様々な分野と地理学を組み合わせた研究をしようと思っています。よろしくおねがいします。

村上 真優子

初めまして。村上真優子と申します。愛媛県西条市出身です。合唱団とクイズ研究会に所属しており、暇さえあればクイズの勉強をしています。高校生の頃から地図が好きで、自然地理にも興味がありましたが、人文地理も気になっています。よろしくお願いします。

矢野 陽平

こんにちは。3 回生の矢野陽平です。愛知県立旭丘高校出身です。バレーボールとバスケットボールのサークルに所属しており、前者では会長を務めています。趣味はスポーツ、ジムでの筋トレ、音楽鑑賞、サイクリングです。よろしくお願いします。

吉田 巖嗣

新3 回生の吉田巖嗣です。探検部と山岳部に所属して、フィールドワークや登山をしています。自然と人間とのかかわりに関心があり、アジアやアフリカの生業を中心とした社会・文化を研究したいとかがえています。

(日本学術振興会特別研究員 (RPD))

松本 美予

特別研究員 (RPD) の松本です。アフリカのレソト王国および南アジアのスリランカ

の山村で、生業変化の研究をしています。はじめはレソトだけで調査をしていましたが、4 年ほど前から比較研究のためスリランカでも調査を開始しました。どうぞよろしくお願いいたします。

(研究生)

東まり子

初めまして、研究生の東まり子と申します。アメリカのユタ州、ソートレイクシティで生まれ育ちました。修士課程では美術史を専攻とし、特に建築保存による場所とイメージ作りに興味があります。趣味は博物館・美術館巡り、そして今は京都中を散歩することです！地理学からの観点を皆さんからたくさん勉強させていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

<2020年度の実習旅行>

2020 年度は、滋賀県高島市で実習調査を行いましたが、新型コロナの感染拡大の影響により、従来のような3 泊4 日の調査旅行は実施できませんでした。1 泊2 日(10 月26 日から27 日)の現地での巡検を含めて、感染防止に配慮しつつ、2 回生・3 回生計20 名の受講生それぞれが、10 月から11 月、対面やオンラインを組み合わせ、調査を行い、報告書を作成しました。



重要文化的景観「大溝の水辺景観」の見学 に向かう

〈学部卒業生・院生の進路〉

（学部卒業生）

- 富永 扶 デジタル・アドバタイジング
・コンソーシアム株式会社
- 牧 萌子 読売新聞大阪本社
- 岸 晃宏 日本アイ・ビー・エムデジ
タルサービス（株）
- 石川 佳果 京阪ホールディングス（株）
- 牛田 聡実 文学研究科（修士課程）
- 川合 周 文学研究科（修士課程）
- 立石 和奏 文学研究科（修士課程）
- 出口 大貴 文学研究科（修士課程）
- 向井 爽人 西日本電信電話（株）

（修士課程修了生）

- 辻尾 智宏 （株）帝国データバンク
- 松本 優希 ジョーンズ・ラング・ラサー
ル（株）関西支社
- 岡本 瑞紀 （株）グローバル・システム
・クリエイト

〈院生の研究状況の報告〉

2020 年度までの院生の研究状況を報告
します。以下は、査読を経た論文のリスト
です。

D 3 岡田 眞太郎

- ・指定管理者制度の活用からみた NPO 法
人の持続可能性—京都府を事例に一，人
文地理，68-3，2016，355-373.

D 2 堀川 泉

- ・調理方式と食育の取り組みからみる小学
校給食と地域との関わり，人文地理，
72-4，2020，403-422.

D 2 桑林 賢治

- ・先住民アイヌによる「記憶の場所」の構
築—北海道・真歌山におけるシャクシャ
インの顕彰を事例に一，人文地理，73-1，
2021，5-30.
- ・荘園景観の文化財化をめぐる価値づけと
地域住民—重要文化的景観「日根荘大木
の農村景観」を事例に一，史林，100-3，
2017，43-66.

D 2 金 玗熙

- ・한반도 주요 도서 지역의 기후변화 지표 식물
분포（朝鮮半島主要島嶼地域の気候変化
指標植物の分布），*Journal of*
Environmental Science International, 30
(1), 2021, 29-43. (joint authorship)
- ・식물상 자료에 기초한 한반도 도서 지역 의 생
태계 교란 외래식물 분포（植物相資料に基づ

- く朝鮮半島島嶼地域の生態系攪乱外来植物の分布), *Korean Journal of Environmental Biology* 38(3), 2020, 392-403. (joint authorship)
- 도서 지역 어부림의 가치와 활용 -경상남 도 남해군 물건리 방조 어부림을 대상으로- (島嶼地域の漁付林の価値と活用-慶尚南道南海郡勿巾里防潮漁付林を対象に-), 한국도서연구(韓國島嶼研究) 32(4), 2020, 235-251. (joint authorship)
 - Reconstruction of the habitat range suitable for long-tailed goral (*Naemorhedus caudatus*) using fossils from the Paleolithic sites. *Quaternary International* 519, 2019, 101-112. (joint authorship)
 - 서울시 여름철 불쾌지수의 시공간적 특성 (ソウル市夏季不快指数の時空間的特性), *Journal of Climate Change Research* 10(3), 2019, 173-184. (joint authorship)
 - 한반도 최 외곽 도서들의 식물지리적 특성 (韓半島最外郭島嶼にみる植物地理的特性), 대한지리학회지 (大韓地理学会誌) 53(2), 2018, 117-132. (joint authorship)
 - 설악산, 지리산, 한라산 산정부의 식생과 경관 특성 (雪岳山・智異山・漢拏山山頂部の植生と景觀特性), *Journal of Climate Change Research* 8(4), 2017, 401-414. (joint authorship)
 - 전라남도 도서지역 귀화식물의 도서생물지리학적 특성 (全羅南道島嶼地域帰化植物の島嶼生物地理学的特性), 환경영향평가(環境影響評価) 26(4), 2017, 272-289. (joint authorship)
 - Effects of disturbance timing on community

recovery in an intertidal habitat of a Korean rocky shore. *Algae* 32(4), 2017, 325-336. (joint authorship)

- 전라남도 남해안 도서식물상의 도서생물 지리학적 특성 (全羅南道南海岸の島嶼植物にみる島嶼生物地理学的特性), *Journal of Climate Change Research* 7(2), 2016, 143-155. (joint authorship)

<2021年度 講義題目>

* 講義 (系共通科目) *

教授 水野一晴

講義 I 自然地理学概説 (前)

教授 米家泰作

講義 II 人文地理学概説 (後)

* 特殊講義 *

教授 田中和子 Humboldt, Ritter and

Richthofen in the history of geography (後)

教授 水野一晴 世界の自然環境と人々の生活や社会 1 (前) / 世界の自然環境と人々の生活や社会 2 (後)

教授 米家泰作 山と森の歴史地理 (前) / 帝国日本と地理的知 (後)

人環教授 小方登 地理情報・衛星画像の処理・分析の基礎 (前)

人環教授 小島泰雄

中国における都市農村関係 (前)

地球環境学舎教授 山村亜希 論文とフィールドから学ぶ歴史地理学 (前)

防災研准教授 松四雄騎 湿潤変動帯の自然地理学とその応用としての斜面減災論 (前期・集中)

アジア・アフリカ地域研究研究科 小坂康之

自然生態論Ⅰ（前）

アジア・アフリカ地域研究研究科 大山修一

アフリカの自然と文化，社会に関する地理学（前）

講師 西村雄一郎 ラオス社会の人々の日常生活と自然環境（前）／時間地理学の過去・現在・未来（後）

講師 神田孝治 文化と空間から問う近代の観光地（前）／移動から問う現代観光の姿（後）

講師 中澤高志 社会・経済思想としての立地論（前期・集中）

講師 藤岡悠一郎 環境地理学の概論（前期・集中）

* 演習Ⅰ A

— 地理学研究法 1A —（前期）

田中和子・水野一晴・米家泰作

* 演習Ⅰ B

— 地理学研究法 1B —（後期）

田中和子・水野一晴・米家泰作

* 演習Ⅱ A

— 4 回生演習 1A —（前期）

田中和子・水野一晴・米家泰作

* 演習Ⅱ B

— 4 回生演習 1B —（前期）

田中和子・水野一晴・米家泰作

地球環境学舎教授 山村亜希 『信長公記』

の地理を読む・歩く（後期）

* 講読 *

教授 田中和子 Reading English Materials on GeographyⅠ（前）／Reading English Materials on GeographyⅡ（後）

教授 田中和子 Reading German Materials on Geography（通年）

文学研究科教授 小山 哲

フランス地理書講読（前）（後）

人文科学研究所助教 都留俊太郎

中国地理書講読（前）（後）

* 地理学実習（通年） *

水野一晴・米家泰作

* 大学院演習—地域の諸問題—（通年） *

田中和子・水野一晴・米家泰作

* 大学院演習

人環教授 小島泰雄 農村を再考する（後）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

事務局から

< 地理学談話会2020年度会計報告 >

（2020 年 4 月 1 日～ 2021 年 3 月 31 日）

【資金会計】

＜収入＞

年会費 220,000

(※ 2020/10/18 地理学名義で入金含)

寄附金 75,000

(※田中(1979 卒))

利子 0

前年度繰越金 44,398

計 339,398

＜支出＞

運営への振替 127,113

郵便振替手数料 15,006

次年度への繰越 197,279

計 339,398

【運営会計】

＜収入＞

資金会計からの振替 127,113

秋季懇親会会費(不開催) 0

春季懇親会会費(不開催) 0

計 127,113

＜支出＞

秋季懇親会(不開催) 0

講師交通費(講演会不開催, オンライン

OB 交流会) 0

OB 交流会経費(オンライン) 0

春季論文発表会経費(オンライン) 0

会報・名簿等印刷費 18,000

会報製本費用 0

通信・文具等費 109,113

弔電・供花等 0

計 127,113

＜計報＞

前回の会報発行以降、会員の方の計報連絡はありませんでした。

＜住所不明者についてお願い＞

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。

(数字は卒業年、敬称略)

安福 伸光 (1997 卒)

李 禧淑 (2001 博)

池内 麟太郎 (1973 卒)

石角 強 (1970 卒)

石田 陽介 (2002 卒)

石橋 弘嗣 (2006 卒)

石原 大嗣 (1997 卒)

石原 美歩 (1995 卒)

石村 裕輔 (1992 卒)

伊藤 陽子 (2005 卒)

井上 一男 (1955 卒)

井上 喜徳 (1998 卒)

今井 平八 (1944 卒)

岩部 敏夫 (1991 卒)

上田 直人 (2009 卒)

上村 謙介 (1998 卒)

内山 隆之 (1987 卒)

江崎 健治 (1992 卒)

遠藤 正雄 (1978 卒)

大島 健司 (1992 卒)

太田 隆文 (1997 卒)

大野 宏 (1992 卒)

大山 晃司 (1995 卒)

岡本 靖一 (1967 卒)

岡本 美津子	(1987 卒)	檜崎 こず恵	(1998 卒)
興津 俊之	(1991 卒)	南部 一寿	(1999 卒)
小口 稔	(1991 卒)	西井 理子	(2002 卒)
小野寺 伴彦	(2000 卒)	西尾 正隆	(1970 卒)
楓 雅之	(1945 卒)	西澤 仁晴	(1974 卒)
片寄 弘也	(2004 卒)	西山 隆彦	(1995 卒)
勝村 眞知子	(1973 卒)	能勢 正寛	(1962 卒)
叶谷 房子	(1998 卒)	野瀬 美咲	(2010 卒)
川合 大地	(1998 卒)	林 洋子	(1965 卒)
川添 和明	(1995 卒)	原 健太	(2003 卒)
貴志 謙介	(2981 卒)	原 潤	(1997 卒)
木地 節郎	(1949 卒)	福田 新一	(1971 卒)
北口 卓美	(1990 卒)	古川 昇平	(2006 卒)
木村 宏	(1949 卒)	前田 奈実	(1999 卒)
木村 洋之介	(1949 卒)	松本 弘史	(1983 卒)
木村 理恵	(2002 卒)	御手洗 央治	(1993 卒)
久保田 彰	(2013 卒)	宮原 耕一	(1994 卒)
黒田 真	(1989 卒)	村角 浩明	(2006 卒)
坂部 誠治	(1991 卒)	野城 千穂	(2017 卒)
島崎 郁司	(1996 卒)	保江 志帆	(2003 卒)
嶋野 浩一朗	(1997 卒)	山口 一郎	(1980 卒)
清水 究吾	(1998 卒)	山口 秀樹	(1997 卒)
新谷 泰久	(1990 卒)	山下 良	(1989 卒)
鈴木 伸国	(1988 卒)	山田 潤哉	(1997 卒)
田島 渡	(1948 選)	山田 憲子	(1970 卒)
田辺 賢一郎	(1949 卒)	山田 浩子	(2000 卒)
田村 麗花	(2014 卒)	山中 一高	(1991 卒)
都子 屋	(1940 委)	吉岡 朝日	(2003 卒)
津田 朋一	(1996 卒)	吉野 修司	(1995 卒)
帙田 剛	(2014 卒)	吉村 健志	(2002 卒)
長尾 拓磨	(2013 卒)	六嶋 美也子	(1993 卒)
中筋 護	(1977 卒)	渡邊 克己	(2004 卒)
中山 耕至	(1993 卒)		
那須 久代	(1988 卒)		

＜オープンキャンパス：2020年度の 報告と2021年度のお知らせ＞

2020年8月6日から9月30日までの機関、特設サイトによりオンラインで京都大学のオープンキャンパスが開催されました。恒例の文学部の見学・説明会も、対面では実施されませんでした。

2021年度の京都大学主催のオープンキャンパスについては、2020年度と同様、8月頃、オンラインで実施される予定です。
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/>
をご覧ください。（詳細未定）

＜2021年度秋季地理学談話会 について＞

本年は、新型コロナウイルスの流行が続いておりますため、まだ計画を詰めておりません。決まり次第、お知らせいたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

＜地理学談話会名簿改訂の お知らせとお願い＞

本年度は、名簿改訂の予定です（9月発送予定）。恐れ入りますが、必ず、同封のはがきにて、ご連絡先等をお知らせください。準備と印刷の都合

上、6月末必着でお送りくださいますよう、お願いいたします。

なお、お寄せいただいた情報は、**会員名簿の作成および談話会・地理学教室から会員の皆様へのお知らせやご案内等のみに活用いたします。どうぞ、ご了解くださいますよう、お願い申し上げます。**

☆☆☆

一年あたり千円を目処として、それぞれの会員の方々に、談話会の運営経費へのご協力をお願いしております。随時、ご支援をお願いいたします。納入の際は、同封しております「郵便振替用紙」をご利用ください。

また、郵便振り込みも可能ですので、下記の口座にお願いいたします。

みずほ銀行 出町支店（普）

1143293 チリガク ダンワカイ

（チリガクとダンワカイの間にスペース有り）

☆☆☆

昨今の諸経費（印刷費、送料、手数料など）の大幅な値上がりにより、談話会の運営経費がたいへん逼迫しております。本年は、『談話会名簿』の改訂（5年ごと）を予定しており、やりくりにも苦慮しております。

会員の皆様には、まとめ払い等の手立てもご検討いただけましたら、幸いに存じます。

京都大学文学部地理学教室談話会 会報 第 31 号

発行日 2021 年 5 月 15 日

発行者 地理学談話会

〒 606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

TEL : 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/geo-top_page/